

「夕があり朝があった！！」

～能動と受動 メタノイヤの道5～

ヨブ記42：1-6

能動的と受動的

能動的というのは自ら進んで行動をする姿です。受動的というのは相手や第三者、環境や状況によってそれを受け取るという姿で、自分は何もしない、止まっている状態です。棚からぼた餅の状態です。しかし、能動の状態というのは棚にあるぼた餅を探して取りに行き、棚にぼた餅がないならば自分でぼた餅を作るという状態です。

悪魔は日夜働いている…

悪魔はアダムとエバを誘惑しました。人間が道を外しさえすれば神様は正義のお方なので罰として滅ぼさざるを得ないとわかっていたからです。ところが、キリストが十字架にかかり、自ら犠牲を背負い救いの道を開かれました。「そこまで人間を愛するのかわか！？」と悪魔にとっては最大の痛みです。ですから、十字架の奇跡がなされた今でもその奇跡を何とか無効にするために彼らは働いているわけです。

地を歩き巡り、歩き回って来た悪魔は神様にヨブを告発します。1ペテロ5：8にも「…あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」と書かれています。悪魔は何を捜しているのでしょうか？人の罪は「言葉」に現われます。悪魔によって私たちの心の中に撒かれた種が処理されないまま残っていて、いざという時に言葉となって出てくるのです。心の中にふつふつと煮えている種はないでしょうか？特に指摘されたり、忠告されたり、注意されたり、閉ざされたり…非常に葛藤をもたらす種です。その葛藤の種は自分のおさめておくことができません。だから人は人に話さず話さないとおさまらないのです。この「話す」という行動。これを悪魔は捜しているのです。人は本来神様に話すように造られました。ところが、神様に伝えて解決する前にまず人に話してしまうので神様が働く余地がありません。それを繰り返すことを悪魔は喜んでいて、それが彼らのエサだからです。

暗夜の中で…

第一の試練：家畜、子ども達を失う(ヨブ1:20-22) …一度に3つの事件が起きました。けれど、ヨブは罪を犯さず神に愚痴をこぼしませんでした。第二の試練：腫れ物、妻の言葉(ヨブ1:20-22, 2:9-10) …第一の試練で揺るがなかったヨブも自分の体・命に何か起これば神様を否定すると悪魔は更に告発していきます。けれど、ヨブは罪を犯すようなことを口にすることはありませんでした。このような瞬発的な出来事にはヨブは強かったのです。瞬発的な出来事というのはどちらかというと女性にとっては危険で、ヨブの妻のような言葉を発してしまいうすいのです。第三の試練：継続的試み ヨブの暗夜(ヨブ42:1-6) …この継続的試練というのは男性にとって危険なのです。男性にはプライドというものがあるので継続的に否定されるとだんだんと聞き直っていきます。ヨブは三人の友が来て色々と言ってきた時、7日間は黙って耐えていました。けれど、ついにヨブも堪忍袋の緒が切れて話し始めてしまったのです。「私の生まれた日は滅びうせよ。…」(ヨブ3:3) それまで頑張ってきたのですがとうとう逆ギレです。けれど、ここからヨブの暗夜が始まるのです。これが良かったのです。神様は創世の時代に最初に夜を造りました。「…夕があり、朝があった。第一日。」(創1:5) アダムが神様によって能動的に動くために受動的な安息を備えたのです。この受動的安息というのは、人間が自ら意思をもって行動するのではなく、神様が人間に与える安息です。人が事を始める前に神様の前に出てすべてを委ねて渡すという決断をすると(能動的)神様がその人を支配して力を与えるのです。(受動的)

ここで大切なことは、100%明け渡すかどうかです。「私の最も恐れたものが、私を襲い、私のおびえたものが、私の身にふりかかったからだ。」(ヨブ3:25) ヨブは自分は絶対に間違わないように正しく生きるんだという強い思いがあったのですが、潜在的に第三者のことを信じない「自己義」があったのです。ですから、息子達に対しては信じていなかったのです。これは非常に微妙です。確かに私たちは人を信じているわけではありません。けれど、ヨブは息子達を信じたかったのですが、神様を信じていなくて恐れていたのです。ヨブは「私は裸で母の胎から出てきた。また、裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」(ヨブ1:21) とまで言えるのに、1%の不信頼が強いプライドとなって自己義になっていたのです。この思いは潜在的に人間の中にあ

るのです。過去に何かの出来事や痛みがあったのかもしれませんが。この領域だけは神様を信じてしまうと自分のプライドを傷つけてしまい、自分が負けてしまうのです。ヨブは暗夜になってこの部分と向き合ったのです。ですから、私たちも特に受け入れられない出来事、明け渡したくない領域に対して神様の前で受け入れて神様に祈ることを願いましょう。外面的、側面的な部分が解決されてもダメなのです。心の一番深い、私たちの人生に間違った価値観をもたらした最初の脱線に戻って、そこに触れて解決されなければいけないのです。教会に来るのはそのためです。100%を明け渡さないと神様は私たちの神髄にまで入ることができません。「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。…」(黙示3:20) イエス様はもう私たちの内に入っておられますが、開かずの扉があってそこにイエス様が入っていないのです。ヨブにもあったのです。私たちの自己義、つまり聞けない心。ここに神様はノックをしています。

はじめに夜がある 目に見えるものから解放 夜の完全能動から完全受動

夜というのは神様と向き合う時間なのです。私たちは何でも見えているつもり、わかっているつもりで生きています。けれども、私たちは神様の知識は何一つわかっていないのです。人は最終的に暗闇の中でしか神様を見ていくことはできません。神様が何故わざわざ昼と夜を造ったかというこの暗闇の中で私たちが目を閉じて静まる時間でしか神様に戻れないということです。昼間に能動的に自分の決意で生きる私たちは、この夜の受動的な神の癒しがないと神に戻れないわけなのです。

耳からの成長！！

私たちクリスチャンが最終的に到達するのは、鼻から息の出る者に頼らず、且つ私たちの周りにいる倒れそうな人を助けられる歩みになることです。そこには成長過程があります。神様はいきなりゼロから100になりなさいとは言いません。神様のもとに近づいていき、キリストの満ち満ちた身丈にまで成長していくのです。ですから、聖書のみことばを聞くことがとても大切で、礼拝はその「聞く」ということなのです。「…信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」(ローマ10:17) 聞くことは信仰の初歩です。そこから成長していくのです。

自己義から解放され友のために救し仕える

自己義というのはあり得ません。神様の前で人と自分を比較して正しいか正しくないかを見ているからです。でもこれは違います。神様の前で自分が正しいか正しくないかなのです。ヨブは暗夜の中で神様の前で自分は正しくないということがわかるのです。ヨブは最後に神様にもう二度と口答えはいたしませんと謝りました。(ヨブ42:6)すると神様はヨブのところに来た三人の友は確かに神様が語ろうとすることではないことを語り、ヨブを苦しめたことはわかっておられたことを語ります。けれど、神様はその悪かった三人の友をヨブのところへ送るから彼らのために祈ってあげなさいと言われました。ヨブが友のために祈ると、ヨブは回復を与えられ、財産も以前よりも更に祝福されました。ヨブは今までの自己義の生き方から変わったのです。「私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。」(ヨブ42:5) ヨブは自分の領域でしか信じていなかった神様がどんなに偉大なのかをこの目で見た！と言ったのです。

暗闇に入った時…

逃げないで神様をさがしましょう。神様に向き合う決断は自分が必要なければいけません。暗闇の中で神様は必ず応えます。

(要約者:全本 みどり)

(4月9日)